第４７回

誰よりも高く、誰よりも遠く。「陸上競技の申し子」

尾 﨑 峰 穂

ozaki　mineho

体は小さいが、持ち前の運動能力と頭脳でどんなスポーツでも大活躍のわんぱく少年。突如十代にして視力を失うも、その活躍ぶりは鳴りをひそめるどころか世界へと――。
7度のパラリンピック出場で、11個のメダル。今回は、世界記録を塗り変えつづけた走幅跳から、予期せぬ競技転向にもかかわらず金メダルを獲得したやり投まで、長年にわたり障害者陸上競技界に君臨した尾﨑峰穂さんに話を伺った。
のほほんとした尾﨑さんの語りは、数々の快挙がまるで何となく達成されてしまったかのような印象を聞き手に抱かせる。しかし、その柔らかい口調から顔を出す茶目っ気やシニカルさから、さまざまな逆境を冷静に分析し、前向きに舵（かじ）を取れる賢さあってこその快挙であることが見えてくるのだ。
視力は失われていても、その聡明（そうめい）な世界観は、障害者スポーツの抱える課題や現代の子どもたちが必要としているもの･ことを鋭く見抜いている。

聞き手／山本浩　文／髙橋玲美　構成／フォート・キシモト　写真／尾﨑峰穂、フォート・キシモト

誰よりも高く、誰よりも遠く。「陸上競技の申し子」　**尾崎峰穂**

お菓子屋さんの わんぱく坊主

―― 新宿のお菓子屋さんにお生まれになったのですよね。

はい。小学校の帰りがけに友だちを集めてランドセルを空にし、そこにジュースの空き瓶などをいっぱい詰めて家に持ち帰り、換金してお小遣い稼ぎをするような子どもでした。お菓子屋の子ということで友達にはうらやましがられたりもしましたが、私自身はあまり甘いものには興味がありませんでしたね（笑）

―― 子どものころからスポーツには親しんでいましたか？

幼いころから道で相撲をとり、友だちを投げ飛ばすなどわんぱくだったこともあり、親に言われて幼稚園から小学2年生まで柔道をやっていました。小学3年生からは地域の少年団で野球などをやりました。走るのも速かったし肩も強かったので、活躍できて楽しかったですね。

―― ご家族に運動能力の高い方が？

いや、全然。「どうしてこんなに運動好きな子が生まれたかね」ってよく言われていました。学校の成績も体育だけはよかったですから。他はなんにも勉強せず、通信簿にはいつも「この子はやればできるのに」って書かれていました（笑）

―― では、将来の夢は野球選手でしたか？

はい。それで、学区を越境して野球部のある中学校に入りました。でも中学1年生のときにレギュラーになれなくて、球拾いばかりでつまらないなーと思っていたところに「君みたいに運動神経がよければ、バレーボール部ですぐレギュラーだよ」と勧誘され、中学2年生からはバレーボール部に転部しました。

―― 越境までして野球部に入ったのに、すんなり方向転換しましたね。

今考えれば、何十人も部員がいるので1年生が補欠なのは当たり前なんですけど、もっと活躍したかったんですね。

スポーツで 活躍していたさなか、 左目に異変

―― ひらめきで戦うタイプでしたか、じっくり策を練るタイプでしたか？

ひらめきでも戦うけど、負けたときには次にどうやったら勝てるかを考えて工夫するタイプでもありました。

―― バレーボール部ではどうでしたか？

すぐにレギュラーにしてもらえて、新宿区で優勝して都大会に進んで……と、すごく楽しくやれました。当時、背は155cmと小さかったのですが、ジャンプ力を買われてアタッカーをしていました。練習は厳しかったですけどそれがまた楽しかったですし。といっても都大会でベスト8というくらいでしたけど。それで、バレーボール推薦で世田谷学園高校に進学しました。

中学3年生　バレーボール部

両親と

小学1年生　運動会

小学4年生　少年野球チームで1番センター（前列左端）

高校時代（前列中央）

―― 世田谷学園高校はスポーツ全般に非常に力を入れている学校ですね。どのくらいからレギュラーになったのですか？
高校1年生のときからです。

―― 大したものですね。バレーボール漬けの毎日だったでしょう。
朝から夜遅くまでやっていました。土日も練習や試合でした。でも高校2年生の終わりごろ、眼鏡を作り直そうとして視力検査をしたときに、左目がほとんど見えなくなっていることがわかったんです。両目で見ることでカバーしていて気づかなかったんですが、左目の視界がほとんど霧のなかでした。それで病院を受診してさまざまな治療を受けたのですが、どんどん悪くなり、高校3年生の春にはバレーボールをやめざるを得なくなりました。学校も退学しました。

飲まず食わずの3日間からの復活

―― どんな思いでしたか？
脊髄からビタミン剤を入れてみたり目の奥に注射をしたり、ドクターが手を尽くしても症状は悪くなる一方で、そのうちに右目の視力もなくなっていって。開頭手術までしたのにさらに見えなくなってしまったときには「もう目の見える世界には戻れないんだな」と悟りました。それから、「もうどうでもいいや。このまま死ぬならそれでいいや」と飲まず食わずの3日間があったのですが、そのうち飽きがきて（笑）　ラジオをつけたらちょうど、障害者のための就職相談についての番組をやっていました。そこで就職に関する情報が得られたんです。「目が見えなくても就職ができるのか？」と思って、母親と一緒に高田馬場にある東京都心身障害者福祉センターに相談に行きました。そうしたら、まずは高卒の資格をとるために盲学校に行けということで。点字を読む訓練、白杖をついての歩行訓練などを1年くらいしてから、都立文京盲学校に入学しました。点字はなかなか指先の感覚がつかめなくて。一生懸命に点字を読んでいると、指先に汗をかいて点字がつぶれてしまうので、パウダーをつけて指先のすべりをよくし、何度も読む練習をしましたね。

―― 3日間で気持ちを切りかえられたのはすばらしいですね。盲学校での生活はどうでしたか？
入る前は「どんな暗い世界なんだろう」と不安でしたが、生徒たちは点字でスラスラ本を読んでいるし、スポーツもバンドもやっているし、これは一般と変わらないな、と安心しました。ああ、盲学校ってこんなに明るく過ごせる場所なんだって。弱視の生徒もかなりいました。最初はそれを知らなかったので、隣にいた2人が配られた給食の献立表を見ながら、今後の献立についてあれこれ言っているのを聞いて「ああ、この人たち見えないのに見えるフリをしてるよ」などと思ったのですが、家に帰って母親に献立の内容を確認してみると正しくて、「あっ、彼らは本当に見えてたんだ」って（笑）

陸上競技との出会い 即、新記録

―― 運動は？
いや、そのころはまだ新宿から飯田橋まで電車に乗って学校に行くのも命がけの思いでしたから……。でも盲学校に入学したその年、19歳のときですが、都の障害者スポーツ大会に出ないかと先生に勧められたんです。「スポーツなんてとんでもないです」と言ったんですが、「だって君、前は野球やバレーボールをやってたんじゃなかった？」と。「それは見えていたときの話で、今は怖くて無理です」と言ったら、「ソフトボール投や立幅跳なら、立っているところから投げたり跳んだりするだけだから危なくないよ、怖くないでしょ」と言われて。それで練習もせず、とりあえず出場してみたら、両方とも大会新記録で優勝でした。

―― それはすごいですね！
ただ、このときは2つの思いが入り交じって複雑な気持ちでした。「今までスポーツをやってきたので障害者のなかで勝つのは当たり前だろ」っていう気持ちと、「もうスポーツなんてできないと思ってたのに、できたじゃないか！ すごく楽しい！」という喜びですね。その年（1983年）に行われた全国身体障害者スポーツ大会にも同じ2種目で出場して、日本新記録で優勝しました。このときの記録は、前よりもちょっと練習して、立幅跳で2m90cm、ソフトボール投は70mちょっとでしたね。

―― どんな練習をされたのですか？
ソフトボール投は音の鳴るほうに向かってひたすらボールを投げ、立幅跳なら砂場の縁に立った状態からしゃがみ込んで、手を大きく振り上げて一歩足を投げ出すとか。

―― もともと持っているジャンプ力や瞬発力に加えて、バレーボールと通ずるところがあったのでしょうか？
アタックの動きと投げる動きに、手首の使い方などで共通性があったのと、バレーボールで培ったジャンプ力が活きましたね。学校の担任の先生に「安全な競技なんだから自信を持ってやれ」と励まされながら、毎日、陸上部にまじって暗くなるまで練習しました。そのあと、冬に「6月の国際身体障害者スポーツ大会に君が選ばれてるよ」と。それがニューヨークパラリンピックでした。

「ニューヨークに行きたい」で走幅跳の恐怖を克服

―― 1984年、時期としてはロサンゼルスオリンピックのときですね。でもまだこのときはオリンピックと同じ会場ではなく、ニューヨークで開催された大会でした。この大会については知っていましたか？
まったく知らなかったです。ただニューヨークに行けるということだけで、喜んで出場を決めました（笑）でも、3月に盲学校を卒業した直後くらいに所沢の国立障害者リハビリテーションセンターで合宿があったんですが、そこでソフトボール投と立幅跳がパラリンピックの種目にはないことがわかったんです。それで、他の投てき種目と走幅跳で出場してはどうかと。走って跳ぶなんて恐怖以外の何ものでもなかったですから、これが隣の県で開催される大会だったら出場しなかったと思います。でも、ニューヨークに行けると聞いて、怖いながらも一歩ずつ助走の練習をしました。最初はまっすぐ走ることもできなかったので、まずは横にそれず走る練習、次に跳ぶ距離をかせぐためにお尻と足をくっつける練習。誤って砂場でない硬い地面に着地してしまって「こんなに痛い思いするんならやめようかな」と思ったことも何度かありました。痛い思いをすると、また怖くなって1歩、2歩の助走に戻ったり……。でも大会前には、11歩の助走で5m70～80cmまで跳べるようになっていました。

―― 指導者はいましたか？
幅跳び専門の人ではなかったので、踏み切るときに手を叩いて合図の音を出してくれるくらいでした。

―― フォームなどはどうやって身につけたのですか？
自分で考えました。全力で走って高く跳べば距離が出るだろうと。「スピードと高さ、スピードと高さ……」とそればっかりを念じて、屈伸するとか腕を振るといった工夫をしました。そのせいか、私のジャンプは他にはないくらいの高さだったようです。

―― やり投の練習は？
所沢に練習できるグラウンドがあってたまに親に連れて行ってもらいましたが、普段はやりではなくウェイトのあるボールを投げるくらいでしたかね。

―― 走りの練習は？
円周走といってグラウンドの真ん中に杭を打って、15mの縄をそこにかけて、腰に巻いてグルグル走るんです。1周100mくらいです。そうすると、人の手を借りず自分だけで練習できました。

初の国際舞台で“ひとりメダルラッシュ”

―― さて、いよいよ1984年、ニューヨークです。
当時は出場するために必要な標準記録もなかったので、どうせ出るならと、走幅跳、やり投、円盤投、三段跳、100m走の5種目にエントリーしました。ちゃんと練習して臨んだのは走幅跳だけでしたけどね。

―― 当時はどこからの派遣でしたか？　渡航費などは？
まずは東京都から、学校の体育の先生を通じて話がきました。ユニフォーム、合宿や渡航費など、すべて国の負担でした。

走幅跳、ソフトボール投の出場を勧めてくれた本橋先生

ニューヨークパラリンピック　走幅跳

―― 選手団は何人でしたか？
17人でした。行きの飛行機では何回も食事が出て、こりゃおもしろい所だなと思いました。12時間くらい飛行機に乗っていたのですが、好奇心のままに機内を歩き回ったりストレッチしたりして、わくわくしながら向かいましたね。

―― 現地についてからはどう過ごしましたか？
到着から大会本番まで1週間ほどあって、レセプションや入村式などのイベントがありましたね。練習トラックがあったのですが、練習中に砂場じゃないところに着地をして足をひどく捻挫してしまい、足を引きずりながらの開会式でした。

―― 最初の種目は？
まったく練習していなかった円盤投でした。自分はそのころは少しは見えていたのでB2というクラスで、結果は、巨大なアメリカ人が2人いてそれぞれ35～36m投げ、自分は22～23mで銅メダルでした。

―― 全然やってないのに銅メダルですか？
めちゃくちゃな投げ方でした、今思うと（笑）

―― 次の種目は？
三段跳でした。三段跳は1歩、2歩、3歩とある程度均等にジャンプをしていかなければならないのですが、私は練習もしていなかったので2歩目がすごく短くなってしまい、正解とはおよそかけ離れた跳び方になってしまったのに、13m54cmを跳んで銀メダルでした。金メダルのユーゴスラビアの選手は14m52cm跳んだので、1mの差がありましたね。

入魂の走幅跳
ドラマティックな結末

―― アムステルダムオリンピックで織田幹雄さんが金メダルを獲ったときの三段跳の記録が15m21cmですよね。全然練習もせず13m跳んじゃったというのもすごいですね。そしていよいよ走幅跳です。
私は11歩までしか助走できなかったですけど、他の人達はもっとずっと遠くから走ってくるのに驚きました。でも学校で練習していたときは5m70cmだったのに、本番の1本目で6m11cmを跳べて、こりゃおもしろい！と。2本目では6m41cmの世界記録が出ました。世界記録を計るために金属性のメジャーを係員が取りに行くといって30分待たされ、「世界大会でもこんなにのどかなんだな」と気が楽になりましたね。その後は三段跳で金メダルをとったユーゴの選手との一騎打ちになりました。4本目でユーゴの選手が6m45cmを跳んで、私は4本目、5本目は6m35cmくらいがいいとこで。でも6本目で私が最後のジャンパーとしてピットに立ったとき、後ろからの風に煽られるようにして、集中する前にスタートしてしまったんです。歩数も把握できないまま走っていって、どうしようと思いながら踏み切ったところが、踏み切り板のど真ん中。空中では自分でも驚くほど高く上がってしまい、お尻から落ちてしまいました。それで「こりゃだめだな……」と落ち込んでいたら、いろんな選手が頭を叩きにきて、何が起こったのかなと思ったら「6m48cm」というアナウンスがあったんです。それまで走って跳ぶことも怖いなと思ってたのにここまでこられたんだな、不可能が可能になったんだなと思った瞬間でしたね。

―― 最後の1本で世界記録を更新とは、ドラマのようですね。
自分では失敗ジャンプだと思ったのに、コーチによると、「足を遠くに投げ出してぎりぎりまでお尻を入

誰よりも高く、誰よりも遠く。「陸上競技の申し子」

尾﨑峰穂

れこんでいるすばらしい着地だった」ということでした。表彰台では、私が一番高いところに立っていたのに、銀メダルのユーゴの選手の方が頭が上にあったんですね。彼は身長が190cm以上もあったんです。「はー、こりゃ目がはっきり見えていたら逆に怖じ気づいて跳べなかったかもしれないな」と思いましたね。

―― 初めて大会に出て、3種目それぞれ銅、銀、金ときたわけですね。一切あがったり怖じ気づいたりとかはなかったんですね。

大きな大会だけど何種目も出られるし、楽しい楽しいっていう感覚でしたね。スタンドにはあまり人がいなかったので、こういうのでも世界大会かと思いましたけど（笑）　あとは、練習もしないで出た最初の円盤投でいきなり銅メダル?という感じはありましたね。

スポーツひとすじの環境で記録更新に邁進

―― その後、生活はかなり変わりました？

当時は鍼灸マッサージの資格をとる理療科に通っていてスポーツひとすじというわけにはいきませんでしたが、「自分も走幅跳をやってみたい」と言う仲間も現れて、教えたらその仲間もアジア大会に出るまでになりました。そのあと病院に就職をして、スポーツも終わりだと思っていたところ、ソウルパラリンピックの代表に選ばれました。病院に通っていたら練習ができないし、どうしようかと悩んだ末に、病院を辞めて練習に打ち込むことにしたんです。そして、ちょうど北区十条に障害者総合スポーツセンターができたので、新宿から北区に引っ越して毎日そこに通える環境をつくりました。

―― プロのような生活ですね。次の具体的な目標というのも定めておられたわけですか？

次は三段跳も合わせてジャンプで2個金メダルを獲ろうと思っていました。朝から晩までそこで練習していました。食事はそこのレストランだったり、自分でおにぎりを持って行ったりして。

―― パラリンピック以外の大会に出られたりはしていないのですか？

国際大会はパラリンピックにしか出ていないんです。

―― ソウル大会はどうでしたか？

この大会からオリンピックと同じ会場で開催されたので、カール・ルイスやベン・ジョンソンと同じコースを走れることが嬉しくて、そのコースだけの写真を撮って家族に見せたりしていました（笑）

このころは現地についてからクラス分けのための検査がありました。検査をしてみると、視力が落ちていて目の前に出された指の数がわからず、B1（全盲クラス）に変更となりました。明るいところではちょっとは見えてたから、ニューヨークと同じB2（弱視クラス）でがんばろうと思って来たのに、残念でした。現在は現地に行く前に、パラリンピックが認定した資格を持つ複数のドクターが判定するといった細かい決まりができていますけどね。

ニューヨークパラリンピック表彰式にて（円盤投銅メダル）

―― 種目は？

ニューヨークと同じく、円盤投、やり投、走幅跳、三段跳、100m走の5種目で出場しました。B1の三段跳は、立った状態から跳ぶ立ち三段跳で、練習したことがなかったのですが、世界で私だけが9m超えの9m01cmを跳びました。他の人は8m95cmくらいでした。その種目はその大会でなくなっちゃったので、私は永遠の記録ホルダーです（笑）

初出場したニューヨークパラリンピックでの金メダル

1988年
ソウルパラリンピック

バルセロナパラリンピック表彰式にて
（走幅跳金メダル）

1992年　バルセロナパラリンピックの
スタンドにて

―― 普通の陸上競技の選手でもなかなかいきなり9mは跳べないですよね。ソウルでは向かうところ敵なしでしたか？

走幅跳はスタジアムの声援がすごくて、合図の音が聞こえなくてジャストの踏みきりができず、8人中8位で決勝に残りましたが、そのあとB1の世界新記録となる6m27cmを跳んで、金メダルを獲りました。

―― 次のバルセロナ大会での思い出は？

この大会から初めて標準記録が設けられて、クリアできた走幅跳、三段跳、やり投、100m走の4種目に出場しました。走幅跳は1本目から自分の6m27cmの世界記録を10cm上回る6m37cmを跳んで優勝しました。

ナイキCMで躍動した初めての障害者アスリート

―― 20歳でニューヨークの舞台を踏んで、28歳でバルセロナ。乗りに乗っている時期だったんでしょう。

そこまではそうでした。でもその次のアトランタでは、走幅跳でソウル大会3位だったスペインの全盲の選手が6m67cmを跳んで、世界記録を塗り替えられました。「おめでとう」と握手をしに行ったら、通訳を介して「俺はいつもお前を目指して抜こうとがんばってきた」と。しまったー！と思いました（笑）

―― 世界が尾崎さんを目指し、追われる側になっていたってことですね。

ジャンプでは負ける気がしていなかったので、「なんで負けるんだ」と思いましたね（笑）

―― アトランタでは32歳。

このときは痛風で走れなくなっていたので、走幅跳は難しいなと思って、やり投でがんばって金を獲りました。表彰式で、センターポールに日の丸が揚がって国歌が流れると、他の競技をしている選手達も止まって君が代を聴いてくれるんですね。それまで「日本の国歌は暗いなぁ、他の国の国歌はもっと明るいのに」と思っていたのに、低音が心にずしっと響いて。「俺が獲った金メダルで、こんなにすばらしい曲をみんなが聴いてくれて誇らしい。またがんばる4年間が始まるな」と思いました。

―― その翌年の1997年には、ナイキのCMに出演されましたね。

マッキャンエリクソンというナイキの広告代理店が僕の出場した大会を観に来ていて、障害者ということは関係なく、「この人のジャンプの高さをコマーシャルにしたい」と思ったのが始まりだったそうです。それで結果的に、ナイキのCMに初めて障害者スポーツが取り上げられることになったんです。障害のことよりもまず「この人のジャンプはすごい」、その次に「この人は目が見えなかったんだ」っていう取り上げ方をしてくれたのが嬉しかったです。このCMはかなり反響があって、全国から講演依頼が来たり、スポンサーがついてくれたりするようになりました。

シドニーで意地の銅、そしてアテネ、北京

―― そして、37歳でシドニーへ。

走る速さやジャンプ力といった瞬発系の能力が衰えてきたので、やり投重視になりました。アトランタで金メダルを獲ったころよりも10mくらい記録を伸ばし、52mくらい投げられるようになって大会に臨みました。でも大会本番になって、長いやりにちょっと左手を添えるという投げ方を「両手投げのルール違反だ」と言われ、急遽直してやったんですがうまくいかず、銅メダルに終わりました。やっぱり自己流でやっていたので、正しいフォームができていなかったのですね。

―― でも突然フォームを変えて、ファウル連発で予選敗退になってもおかしくないのによく銅メダルを。

ファウル連発はしましたが、5投目、6投目で少しずつコツがつかめてきて。ただまともに投げられないまま終わったので悔しくて悔しくて、また4年先の目標ができましたね。1位の選手がちょうど私の4つ年上だったので、まだ自分も次の大会をやれるなと思ったこともありました。

誰よりも高く、誰よりも遠く。「陸上競技の申し子」

尾崎峰穂

――「どこまで続けられるだろうか？」といった思いがあったんですね。
走幅跳の記録は落ちてきているし、うーん、いつまで続くかなと。ただ、シドニーもアテネも、標準記録は超えていたので出場していました。

―― そして北京にもお出になる。
アテネでもやり投で銅メダルを獲って、北京ではやり投一本で。私はB1でしたが、この大会ではB2もB3も一緒に競技をしたんです。投げた距離にクラスごとのポイントを加えて、そのポイント数で勝利を争うと。44m46cmを投げて6位に終わり、初めてメダルが獲れない大会になりました。北京から報奨金が出るようになったのにそこでメダルが獲れなかったので、じゃもう一回、ロンドンを目指そうと。そしたら、ロンドンではやり投種目からB1がなくなってしまって……。目標が失われて、パラリンピック生活は終わりました。

―― 北京大会では44歳。44歳でメダル取れないって悔やんでいる人はなかなかいないと思いますが、それでも入賞ですよね。ここまで長くみごとな成績を出し続ける……何が尾崎さんをそうしたんだと思いますか？
やっぱり4年ごとにあるパラリンピックの存在が大きかったですね。大会ごとに目標ができて、次はどの国に行ける、金メダルを獲れば君が代を流せる、そんな頭でずっとやってきました。そして、やっぱり負けないこと、負けたときにはどうしたらいいかをかなり考えてやりましたね。こうじゃないかと思ったら夜中でも外に出てフォームをチェックしてみたり。負けない方法をとにかく考えます。

2000年　シドニーパラリンピック開会式

2000年　シドニーパラリンピック

体で、頭脳で挑戦の人生は続く

―― それがあるから今も体ができているんですね。しかも尾崎さんは、パラリンピックに出場した種目以外のスポーツにも挑戦しておられます。
マラソンに挑戦してみました。短距離よりもマラソンのほうがヒーローに思えたんですね。テレビでも、マラソンで1位を走ってる選手はずっと映されるじゃないですか。それでやってみたんですけど、だめでしたね。7回フルマラソンをやりましたけど、ベストな記録は4時間15分ですし。でも不思議なもので、マラソンは走れば走るほど達成感があって、これまでに100kmマラソンにも2回出場しました。

1997年　ナイキCM撮影の様子

―― マインドスポーツとも言われるオセロでも、世界をまたにかけてご活躍ですね。いつ始めたのですか？

施設で点字の訓練をしているときに習ったので、19歳のときですね。盲人用のオセロは、石の黒い面はザラザラ、白い面はスベスベ。盤上の線も立体的な枠になっていて、手で触ってできるゲームなんです。最初は負け続けて、角をとるためにはどうしたらいいのかをずいぶん研究したら上達して、大会に出るようになって。負けも多かったのですが、研究を重ねて、定石もどんどん覚えていって、始めてから2年後に、オセロ連盟の大会で優勝し、そのあと三段をもらったりしました。1998年には、イギリスの「マインドスポーツオリンピアード」というボードゲームを中心とした健常者の大会に出場して、オセロで20人中4位になりました。

マインドスポーツオリンピアード
（オセロ大会の様子）

―― 盤面はほとんど頭の中にある？

はい、頭の中に。この大会でメダル獲った選手にはかなり賞金が出たんですけど4位には何もなくて、これも悔しかったですねえ（笑）　点字郵便は無料なので、郵便を送り合って全国の視覚障害者の方たちと一手一手、1年間かけてオセロをやったりもしています。

―― 頭が疲れそうですね。

でもそれが好きなんです、頭を使うのが（笑）

競技の発展とパラリンピックの原点とのはざまで

―― 2020年に向けて、障害者スポーツの環境などについて期待することは。

障害者スポーツのコーチって、障害者スポーツセンターの職員がたまたまやり投の付添いになったというような場合が多いんです。障害についての知識はあっても、競技については明るくない。だから、なかなか見本を見せることが難しいんです。そういう人に対しては「じゃああなたはどれくらい投げたの」って思ってしまうこともあったので、私は人に教える時には「こうやるんだよ」って見本を示し続けます。逆に、競技を専門にやっていた人は、障害について詳しくないことが多いですね。競技の専門的なノウハウを持った人が、障害者に接する時間を増やして障害についての理解も深めてもらえるといいなと。

―― 指導者育成の問題ですね。競技面、障害面の両方で高いレベルの知識が要求されますね。

障害者指導員からコーチになるよりも、一般の競技で活躍した人が障害を理解してコーチになるのがいいと思いますが、日本ではそれがまだ少ないです。

―― パラリンピックの運営についてはいかがですか？

今、メダルの数を減らしていこうという動きがありますね。1つの種目でもカテゴリやクラスによっていくつも金メダルができてしまい、表彰式のたびに他の競技が何度も中断されて競技中の選手の集中力がそがれる、といった問題も言われています。それでクラスを削るという流れになってるんだけど、実はその影響を受けたのがロンドンで出場クラスがなくなってしまった私のB1のやり投だったんです。やっぱり、やり投なども遠くに跳ばせたほうがかっこいいですし、見栄えがするものを残したいのは理解できるんだけど、おかげで重度障害の人達の目標が失われてしまうなと。本来のパラリンピックの目標は何かな？ という根源的な問いが生まれますね。表彰式を別の日に実施するという考えもあります。ただ、自分がとった金メダルで競技場が全部静まって、君が代が流れたときの感動は今でも忘れられませんし、これが次の日に回されたりするとずいぶん感動が薄れるなと思ってしまいますねえ。

2020年以降につなげたいレガシーとは

―― 「観戦する側」についてはどうお感じですか？

北京大会では、スタンドがびっしり埋まってたんですね、CGかなっていうくらい。なんでこんなに埋まってるのかと地元の職員に聞くと、「こんな大会が北京で行われることは、今後ないだろうから、お

金を払ってでも観に来ているんだ」と。こんなの他の大会では見たことがありませんでした。生で観るすばらしさは、写真やビデオなんかとは比べ物にならないと、声を大にして言いたいですね。ぜひ足を運んで観て欲しい。

―― 観客が障害者スポーツの面白さを肌で感じ、理解を深めることが2020年以降のレガシーにもつながるでしょうね。

現代は副音声なども発達して、テレビやラジオなどの電波メディアも便利になりましたね。障害者スポーツ関連の放送も少しずつ増えてきました。そこで、障害者スポーツに馴染みの薄い一般の視聴者にもわかりやすいように、この競技はこんな動きが特徴的、こんな見どころがある、こんなクラス分けがあるといったことを事前に伝えていって欲しいですね。何が大変でどんな面白さがあるのかを伝えて欲しい。マラソン解説者の増田明美さんのように出場者のエピソードつきの解説などがあると、選手に親近感を持てるし引き込まれるように観ると思うんですね。100mでも、B1だと11秒ちょっとかかるし、そのあたりの背景というか予備知識を事前から知ってもらえれば、競技場にも人が集まってくれるんじゃないかと思います。

スポーツで喜びや達成感を味わって欲しい

―― 未来を担う若手や、家の中で閉じこもっている子ども達に言いたいことは？

子どもたちと一緒にスポーツセンターの陸上大会に参加

よく小中学校に講演に行って、走幅跳のジャンプをするんですね。そのときみんなすごく集中して見てくれるんだけど、それで「この人が大変ななかでこんだけいい記録を出したなら、自分もやってみよう」って思う子達がいます。だから何でもいいから、一つやってみようと思ってくれるといいですね。今の子ども達は、「これはすごいや！楽しいや」って思った経験や、何かをがんばって褒められた経験とかが少ないんじゃないかと思います。「どうせ自分なんて」とか、「まあこんなもんか」止まりだったりとか。僕も昔は体育でやらされて嫌だったマラソンを、今は楽しみとしてお金を払ってまでやっています。ここまでやったらこう記録が出るんだっていうのを体験していくことで、新しい目標ができたり、張り合いも出てきます。大勢でなんとなくやらされて終わりという体育の授業では、そういった体験にはなりにくいですね。楽しむためには、自分からやってみるっていうことが必要なんです。スポーツって、体を動かすことでお腹も空くし、頭の回転だってよくなるし、いろんなことがいい方向にいくことが多いと思うんです。あとは、今はメディアも発達しているので、ありとあらゆるスポーツを見せる、そして体験させる。いろんなものをやってみる機会を与えられるといいですね。

―― 息子さんも現在、陸上競技で活躍中ですね。

子どもは今、棒高跳をやってるんです。高校1年生なんですけど、そのなかで一番の記録なんです。息子の応援に行くと、自分の競技とはまた違うドキドキがありますね。自分に、今までにはなかった「スポーツを応援する楽しみ」ができました。ただ、棒高跳は3次元の世界で、私には想像のできない種目なんです。何か口を出しても、「それ全然違うよ」と言われちゃう（笑）　でも、冒険が大好きな私ですから、もしも目が見えたら今からでも挑戦してみたいですね。

―― これからも、スポーツのさまざまな楽しみを伝えていっていただければと思います。ありがとうございました。

スポーツ歴史の検証
Sport History

尾﨑峰穂氏 略歴　世相

1945 第二次世界大戦が終戦
1947 日本国憲法が施行
1950 朝鮮戦争が勃発
1951 安全保障条約を締結
1955 日本の高度経済成長の開始

1963 尾﨑峰穂氏、東京都に生まれる

1964 東海道新幹線が開業

1965 昭和40
第1回全国身体障害者スポーツ大会、
岐阜県にて開催される
これが全国的な競技会の始まりとなる

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸
1973 オイルショックが始まる
1976 ロッキード事件が表面化
1978 日中平和友好条約を調印

1981 昭和56
国際視覚障害者スポーツ協会（IBSA）設立
1981 尾﨑峰穂氏、18歳のときに原因不明の
両視神経萎縮で視力を失う

1982 東北、上越新幹線が開業

1983 昭和58
第1回全日本盲人健康マラソン大会開催
1983 尾﨑峰穂氏、東京都身体障害者スポーツ
大会に出場し、立幅跳、ソフトボール投で
金メダルを獲得
両種目とも大会新記録を樹立

全国身体障害者スポーツ大会に出場し、
立幅跳、ソフトボール投で優勝
両種目とも日本新記録を樹立

1984 昭和59
ニューヨークパラリンピック開催
日本盲人マラソン協会設立
1984 尾﨑峰穂氏、
ニューヨークパラリンピックに出場し、
走幅跳で金メダル、三段跳で銀メダル、
円盤投で銅メダルを獲得
走幅跳で世界新記録を樹立

1988 昭和63
日本身体障害者陸上競技連盟設立
ソウルパラリンピック開催
1988 尾﨑峰穂氏、
ソウルパラリンピックに出場し、
走幅跳で金メダル、立ち三段跳で
金メダル、やり投で銅メダルを獲得
走幅跳、立ち三段跳で世界新記録を樹立

1992 平成4
バルセロナパラリンピック開催
1992 尾﨑峰穂氏、
バルセロナパラリンピックに出場し、
走幅跳で金メダル、やり投で銅メダルを獲得
走幅跳で世界新記録を樹立

1995 阪神・淡路大震災が発生

1996 平成8
アトランタパラリンピック開催
1996 尾﨑峰穂氏、
アトランタパラリンピックに出場し、
やり投で金メダルを獲得

1997 尾﨑峰穂氏、“盲目のアスリート”として
ナイキのCMに出演

日本オセロ連盟のオセロ三段認定
1997 香港が中国に返還される

1998 平成10
IBSA世界視覚障害者スポーツ大会開催
1998 尾﨑峰穂氏、
IBSA世界視覚障害者スポーツ大会に出場し、
やり投で金メダルを獲得

マインドスポーツオリンピアードに
オセロで出場

2000 平成12
シドニーパラリンピック開催
2000 尾﨑峰穂氏、シドニーパラリンピックに
出場し、やり投で銅メダルを獲得

2004 平成16
アテネパラリンピック開催
2004 尾﨑峰穂氏、
アテネパラリンピックに出場し、
やり投で銅メダルを獲得

2008 平成20
北京パラリンピック開催
2008 尾﨑峰穂氏、
北京パラリンピックに出場し、
やり投で6位入賞
2008 リーマンショックが起こる

2011 東日本大震災が発生

2013 平成25
2020年夏季オリンピック・パラリンピックの
開催地が東京に決定

オリンピック・パラリンピック年表

	オリンピック	パラリンピック
1896	第1回 アテネ[ギリシャ]	
1900	第2回 パリ[フランス]	
1904	第3回 セントルイス[アメリカ]	
1908	第4回 ロンドン[イギリス]	
1912	第5回 ストックホルム[スウェーデン]	
1916	第6回 ベルリン[ドイツ]＊中止	
1920	第7回 アントワープ[ベルギー]	
1924	第8回 パリ[フランス]／第1回 シャモニー・モンブラン[フランス]	
1928	第9回 アムステルダム[オランダ]／第2回 サン・モリッツ[スイス]	
1932	第10回 ロサンゼルス[アメリカ]／第3回 レークプラシッド[アメリカ]	
1936	第11回 ベルリン[ドイツ]／第4回 ガルミッシュ・パルテンキルヘン[ドイツ]	
1940	第12回 東京[日本] ＊返上 → ヘルシンキ[フィンランド] ＊中止	
1944	第13回 ロンドン[イギリス] ＊中止	
1948	第14回 ロンドン[イギリス]／第5回 サン・モリッツ[スイス]	
1952	第15回 ヘルシンキ[フィンランド]／第6回 オスロ[ノルウェー]	
1956	第16回 メルボルン[オーストラリア]／ストックホルム[スウェーデン] 第7回 コルチナ・ダンペッツオ[イタリア]	
1960	第17回 ローマ[イタリア] 第8回 スコーバレー[アメリカ]	第1回 ローマ[イタリア]
1964	第18回 東京[日本] 第9回 インスブルック[オーストリア]	第2回 東京[日本]
1968	第19回 メキシコシティー[メキシコ] 第10回 グルノーブル[フランス]	第3回 テルアビブ[イスラエル]
1972	第20回 ミュンヘン[西ドイツ] 第11回 札幌[日本]	第4回 ハイデルベルグ[西ドイツ]
1976	第21回 モントリオール[カナダ] 第12回 インスブルック[オーストリア]	第5回 トロント[カナダ] 第1回 エンシェルツヴィーク[スウェーデン]
1980	第22回 モスクワ[ソ連] 第13回 レークプラシッド[アメリカ]	第6回 アーネム(アルヘルム)[オランダ] 第2回 ヤイロ[ノルウェー]
1984	第23回 ロサンゼルス[アメリカ] 第14回 サラエボ[ユーゴスラビア]	第7回 ニューヨーク[アメリカ] アイレスベリー[イギリス] 第3回 インスブルック[オーストリア]
1988	第24回 ソウル[韓国] 第15回 カルガリー[カナダ]	第8回 ソウル[韓国] 第4回 インスブルック[オーストリア]
1992	第25回 バルセロナ[スペイン] 第16回 アルベールビル[フランス]	第9回 バルセロナ[スペイン] 第5回 ティーニュ/アルベールビル[フランス]
1994	第17回 リレハンメル[ノルウェー]	第6回 リレハンメル[ノルウェー]
1996	第26回 アトランタ[アメリカ]	第10回 アトランタ[アメリカ]
1998	第18回 長野[日本]	第7回 長野[日本]
2000	第27回 シドニー[オーストラリア]	第11回 シドニー[オーストラリア]
2002	第19回 ソルトレークシティ[アメリカ]	第8回 ソルトレークシティ[アメリカ]
2004	第28回 アテネ[ギリシャ]	第12回 アテネ[ギリシャ]
2006	第20回 トリノ[イタリア]	第9回 トリノ[イタリア]
2008	第29回 北京[中国]	第13回 北京[中国]
2010	第21回 バンクーバー[カナダ]	第10回 バンクーバー[カナダ]
2012	第30回 ロンドン[イギリス]	第14回 ロンドン[イギリス]
2014	第22回 ソチ[ロシア]	第11回 ソチ[ロシア]
2016	第31回 リオデジャネイロ[ブラジル]	第15回 リオデジャネイロ[ブラジル]
2018	第23回 平昌[韓国]	第12回 平昌[韓国]
2020	第32回 東京[日本]	第16回 東京[日本]

夏季大会
冬季大会
尾﨑峰穂氏出場大会

パラリンピック・障害者スポーツに関する主なできごと

1888 ドイツで聴覚障害者のためのスポーツクラブが創設

1910 ドイツ聴覚障害者スポーツ協会が創設

1924 国際ろう者スポーツ連盟CISSが設立
第1回国際ろう者スポーツ競技大会開催

1948 ストーク・マンデビル病院内で車いす患者によるアーチェリー大会を開催。これがパラリンピックの原点となる

1952 第1回国際ストーク・マンデビル大会開催

1960 国際ストーク・マンデビル大会委員会ISMGC設立
第1回パラリンピックと位置づけられる国際ストーク・マンデビル大会開催

1976 国際身体障害者スポーツ大会が、初めて国際ストーク・マンデビル競技連盟ISMGFと国際身体障がい者スポーツ機構ISODの共催で行われる

1980 視覚障害者の国際的なスポーツ団体である国際視覚障害者スポーツ協会IBSAが設立

1985 国際オリンピック委員会IOCは国際調整委員会ICCがオリンピック年に開催する、国際身体障害者スポーツ大会を「Paralympicsパラリンピックス」と名乗ることに同意する

1986 国際聴覚障害者スポーツ協会と、国際精神薄弱者スポーツ協会がICCに加盟

1989 国際パラリンピック委員会創設

1999 日本パラリンピック委員会創設

スポーツ歴史の検証
Sport History

両親と

小学4年生　少年野球チームで1番センター（前列左端）

小学1年生　運動会

中学3年生　バレーボール部

走幅跳、ソフトボール投の出場を勧めてくれた
本橋先生

高校時代（前列中央）

初出場したニューヨークパラリンピックでの金メダル

ニューヨークパラリンピック　走幅跳

ニューヨークパラリンピック表彰式にて
（円盤投銅メダル）

1988年　ソウルパラリンピック

バルセロナパラリンピック表彰式にて（走幅跳金メダル）

1992年　バルセロナパラリンピックスタンドにて

1997年　ナイキCM撮影の様子

1997年　ナイキCM撮影の様子

マインドスポーツオリンピアード（オセロ大会の様子）

2000年　シドニーパラリンピック開会式

子どもたちと一緒にスポーツセンターの陸上大会に参加

2000年　シドニーパラリンピック

2004年　アテネパラリンピック　走幅跳

尾﨑峰穂